

東電と中電の共同出資会社、 e-Mobility Power 初代社長に四ツ柳尚子氏 日本充電サービスを承継予定の会社 として設立バスやトラックなど 商用分野へのサービス充実も視野に

昨年10月1日、合同会社日本充電サービスを承継する予定の会社として株式会社 e-Mobility Power (イー・モビリティ・パワー) が設立された。この新会社には東京電力ホールディングスから四ツ柳尚子社長が就任された。大学を卒業して東京電力に入社した四ツ柳社長は、一般の事務系職員と同様に顧客の電気料金の計算、電話受付、電柱など電力設備の移設対応、オール電化住宅の普及促進などを担務してきた、しかし、2011年3月11日、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故が発生して会社生活は一変する。事故から9年の歳月が流れたが、当事者となった東京電力の職員は個人としても社会人としても多大な負担を負うことになる。今回の取材で、四ツ柳社長はその苦難を微塵も見せない。日本のEV (電気自動車) の普及は、足踏み状態にある。要因はいくつかあるが、そのひとつは充電インフラに対する不安感である。欧州各国は2035年ころから排気ガスを出す自動車の製造・販売を禁止する方針を

打ち出している。その受け皿となるエネルギーとして電気に期待が寄せられている。日本の充電インフラの拡充を目指す e-Mobility Power の役割は極めて大きい。

■日本充電サービスの後継会社として設立

まず、e-Mobility Power が承継予定の合同会社日本充電サービスについて簡単に触れておきたい。

日本充電サービスは、充電インフラネットワークの拡大と充実を目的に2014年5月26日に資本金1億円で設立されている。出資者はトヨタ自動車、日産自動車、本田技研工業、三菱自動車工業、日本政策投資銀行、東京電力エナジーパートナー、中部電力が名を連ねている。

事業理念としては「次世代エネルギー対策の重要な牽引役を担う電動車両の普及を目的とし、その礎となる充電ネットワークの拡充を図るため、



トラック・バスなど商用EVの充電インフラに意欲を燃やす四ツ柳尚子社長

国内自動車メーカー4社で設立。充電器の設置推進、充電ネットワークの充実を図ることで、ユーザーにとって電動車両(PHV・PHEV・EV)の利便性が高く、電動車両の機能が最大限生かせる充電環境づくり。」を掲げている。

また、具体的なサービス内容としては凡そ次のように説明している。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

世の中の環境意識のさらなる高まりを背景に、社会的な要請として電動車両の一層の普及

が期待される中、日本充電サービスはインフラとなる充電器ネットワークの拡大と充実に取り組んでいます。

充電器を設置される事業者さまがNCSと提携し、充電器のインフラネットワークを形成することで、電動車両ユーザーが充電会員として均質な充電サービスを楽しむことができます。

このネットワーク拡大と充実は、ユーザーの利便性向上による電動車両の一層の普及拡大はもとより、様々な媒体を通して世の中への充電器設置

※新企業紹介※



EVトラックへの充電。中型トラックまではEV化が進むと見られている



充電インフラが整ってきた一般車両への充電

場所の告知、公共性の認知や来場機会の増加、滞在時間の拡大など、設置事業者の皆さま方のお役にもたてるのではと思います。

なお、一般提携契約に基づいた充電器の運用をされる事業者さまに対しては、NCSから会員の利用実績に応じた提携料(電気代権利金)をお支払いさせていただきます。

電動車両の普及のため、是非とも充電インフラネットワークにご参加いただけますよう、よろしく申し上げます。

☆☆☆☆☆

物事を進める際に「鶏が先か卵が先か」という問題が生じる事がある。EVも同様で電気自動車を開発しても、全国に充電できる設備が整っていかなくては安心して乗ることは出来ない。日本充電サービスは8年間の期限つきで設立しているが、その期限が訪れることから、事業の承継と今後の発展を目的に設立したのがe-Mobility Powerである。

■業務用・商用の領域にも事業を拡大

では、新たに設立した、e-Mobility Powerはどのような事業を展開しようとしているのか。その要旨を会社案内では次のように述べている。

「でんきのチカラが叶える、次世代モビリティ社会。私たち e-Mobility Power は、東京電力ホールディングスと中部電力が電気事業で培ってきた技術やノウハウを活用し、次世代モビリティ社会を支える共同出資会社です。」

では、この次世代モビリティ社会とはどんな社会なのか。

2018年1月、トヨタ自動車はサービス専用の自動運転EV(電気自動車)のコンセプト車「e-Palette Concept」を発表、さらに日産自動車も3月には、自動運転EVの実験車両による無人タクシーサービス「Easy Ride」の実証実験を実施している。他にも、EVと自動運転技術による新し

いモビリティサービスの在り方を模索する動きが活発化している。

「EVと自動運転」によって、今後、自動車産業はどのように変化するのか。自動車産業だけでなく、物流や都市の在り方にも深く関係している。AI(人工知能)やIOT(モノインターネット)、5G(第5世代移動通信システム)と呼ばれる次世代通信も含めて社会は急激に変化しようとしている。

これらを総合して「次世代モビリティ社会」と呼ぶなら、そのエネルギーの源は電気であるし、その供給に大きな役割を果たすのが充電インフラで、e-Mobility Powerの社会的使命がそこにある。

その点について、四ツ柳社長は次のように述べている。

☆☆☆☆☆

e-Mobilityの利点は、コンセントさえあれば、どこでも充電できること。私たちは、車庫、経路、目的地の充電地点ごとに、ユーザーのニーズにフィットした利便性の高い充電サービスをご提

供してまいります。

e-Mobility Powerという社名には、いつでも(everytime)、どこでも(everywhere)、誰もが(everyone)、リーズナブルに充電できるサービスを、自動車はもとより小型モビリティ、船舶など、すべて(everything)のe-Mobilityに提供したいという想いが込められています。

化石燃料に依存しないクリーンなe-Mobilityには、ヒトやモノを運ぶ移動体の価値に加えて、エネルギーセキュリティを支える「動く蓄電池」としての価値があります。

気候変動、大気汚染がますます深刻化している今、CO₂排出量の削減、再エネの安定活用、災害に強いまちづくり、この3つの実現こそ、持続可能な社会システム構築のカギを握ります。

私たちは、e-Mobilityの普及を促進する充電インフラの整備とサービスの提供を通じて、この課題解決に積極的にチャレンジし、持続可能な社会の実現に貢献してまいります。



全国のトラックステーションやトラックターミナル等にも充電器が必要な時代に



充電インフラのサービス強化に向けての検討会

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

■四ツ柳社長ってどんな人？

では、e-Mobility Powerの初代社長に就任した四ツ柳社長はどんな人物なのか。

初対面は東京・千代田区にある東京電力の本社。交換した名刺を手にして、「ヨコミチさんは北海道ですか？」との質問。小学校時代に元北海道知事の横路(ヨコミチ)孝弘氏の娘さんが同級に居たらしい。郷里の広島ではヨコロと発音する家名が幾つもあるので、ご先祖様が明治維新で北海道に移住した際に発音をヨコミチに変えたのではないかと説明すると、四ツ柳社長のご先祖様は能登半島の七尾で、元はツのない四柳で、今も四柳神社が残っていると。同じように北海道に移住した際にツを加えて四ツ柳に改めたらしい、とのこと。

ご尊父は北海道大学に勤め小学2年まで北海道、後に東北大学に移ったので住居も仙台に移り、小学3年から高校卒業まで過ごし、東京の大学に進学、そのまま東京電力に就職したので、思い出は仙台が多いという。

東京電力に入社を決めた際に「祖父から、電力は社会インフラ。どんな事があっても投げ出せない事業、そのことを肝に銘じるようにと厳しく言われたことを良く覚えています。学生だった当時の自分は、今振り返ると、その言葉の重みが分かっていなかった。しかし、福島第一原子力発電所の事故で、祖父の言葉が身に沁みました。」という。

筆者の取材中、ご祖父のことは殆ど語ってなかったが、後にネットで調べてみると北海道電力の父と称される四ツ柳高茂氏であることが判明した。

四ツ柳高茂氏は明治41年9月4日生まれ、東

京帝国大学を卒業して帝国電力に入社、昭和23年に北海道配電営業課長となり、引き継ぎの北海道電力に入社となっている。昭和49年5月には北海道電力の社長、58年6月には取締役会長となり、その翌年には北海道経済連合会会長に就任の大人物である。

ご祖父の北海道での活躍は電力新報社が発行した『四ツ柳高茂・北の灯^{あかり}とともに』に詳しく収録されているが、人生のすべてを電力に捧げた人で、その気質は、このほどe-Mobility Powerの社長に就任した孫娘に引き継がれているようである。

現在のe-Mobility Powerは日本充電サービスの引継ぎ準備が主な仕事であるが、四ツ柳社長は既に近未来の事業の在り方を模索している。その中のひとつが、バスやトラックなど商用分野への充電インフラの拡充である。既に調査・研究を進

めていて物流、人流分野への積極活動を開始するものと思われる。

ご母堂様がピアノの先生だったこともあって、小さい頃はピアノ、中学ではアルトサックスなどにも取り組んでいたが、東京電力に入社以降は「仕事が楽しい」状態が続いていて、趣味は気晴らしの喫茶店巡り、深夜の映画鑑賞といったところらしい。

将来やりたいことは、こども食堂やホームレスサポートの活動。どちらも弱者への支援であるが「経済大国になり、飽食の日本でも食に困る子供やホームレスの状態から抜け出せない人が存在しているのも現実。こうした社会的課題に取り組んでいるNPOの活動に感銘を受けて、会社をリタイアしたら自分も携わりたいと考えるようになった。」と語る。

(横路)